



木村 繁著

宇宙への道標

共立出版, 科学ブックス 14, 1976, A 5 判, 297 頁,
1,400円.

本書はロケット開発の歴史を中心に各種の実験衛星、実用衛星に至るまでの経過を述べてある。地球大気の底から眺めていた宇宙へのあこがれは大変古く、実現できるまでは SF としてその願望を表現していた。実際に宇宙へ飛出すことができたのは第 1 に真空中で飛行できるロケットが開発されたからである。11世紀に中国で発明された火箭に始められたロケットの発展の歴史が詳しく述べられている。第 2 次世界大戦のときドイツで開発した V-2 号の技術は戦後米国およびソ連において宇宙開発への原動力となった。

戦後宇宙開発競争の火ぶたを切ったのは、1957年のソ連の史上初めての人工衛星スプートニク I 号の打上げで、その後1969年までは月探査など米ソの競争の形で発展してきたが、70年代に入ると国民生活に直接役立つ方向へと軌道修正され、気象衛星・通信衛星などに重点をおく現実の世界にもどり、アポロ計画も第17号で中止されスペースシャトルやスペースラブへ主力が向かっている。

いっぽうわが国のロケット開発は戦争末期の“桜花”や“秋水”等でかなり技術を持っていたと思われるが、戦後新たにペンシルロケットから始められ、R, S, M ロケット等の東大グループと、Nロケットシリーズの宇宙開発事業団グループの両者による開発が続けられている。世界各国の衛星打上げ状況は米国とソ連が群をぬいて多いが、そのほか、英、加、伊、仏、西独、豪、日、中、蘭、西、印、インドネシア、ESRO、ESA、NATO、東欧諸国が衛星を打上げている。これらのうち独自のロケットを開発しているのは米ソのほか、仏、日、および中国で、仏は自国のロケットのほか、米国およびソ連のロケットを使って衛星を打上げているのが特徴的である。

(小平信彦)

気象学会および関連学会行事予定

行 事 名	開 催 年 月 日	主 催 団 体 等	場 所
第11回 夏季大学「新しい気象学」教室	昭和52年7月26日～29日	日本気象学会	気象庁講堂
第14回 自然災害科学総合シンポジウム	昭和52年8月29日～30日		北海道大学工学部
月例会「高層気象」	昭和52年9月29日	日本気象学会	気象庁
昭和52年度 日本気象学会秋季大会	昭和52年10月4日～6日	日本気象学会	札幌市教育文化会館
第3回リモートセンシング・シンポジウム	昭和52年11月4日～5日		機械振興会館
第24回 風に関するシンポジウム	昭和52年11月11日		日大生産工学部(習志野校舎)